

夜明け前より瑠璃色な

CLOUDS and darkness are round about about, and judgments are brought down.
A fire goeth before him, and burneth up his enemies round about. His trainings enlightened the world, and the earth trembled.
The hills melted like wax, at the presence of the LORD, at the presence of the LORD of the whole earth.
The heavens declare his greatness, and all the people see his glory.



オーガストオフィシャルハンドブック
2006年秋号

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは。オーガスト／ARIAです。
初めてこの冊子をお手に取って頂いた方、はじめまして。今後どうぞよろしくお祈りします。
この度は、オーガストオフィシャルハンドブックをお手にとって頂き、ありがとうございました。

さて、12月7日発売のPS2版『夜明け前より瑠璃色な』ですが、これを書いている時点ではデバッグ作業最終盤です。いよいよ発売が迫ってまいりました。皆様、どうぞよろしくお祈り致します。

一方、9月には脳みそホエホエ先生が「電撃大王」誌で連載している漫画の単行本が発売され、10月からは『夜明け前より瑠璃色な』のTVアニメーションも始まりました。

多くの方に支えられつつ『夜明け前より瑠璃色な』の世界が広がっています。原作者としてこれに勝る喜びはありません。

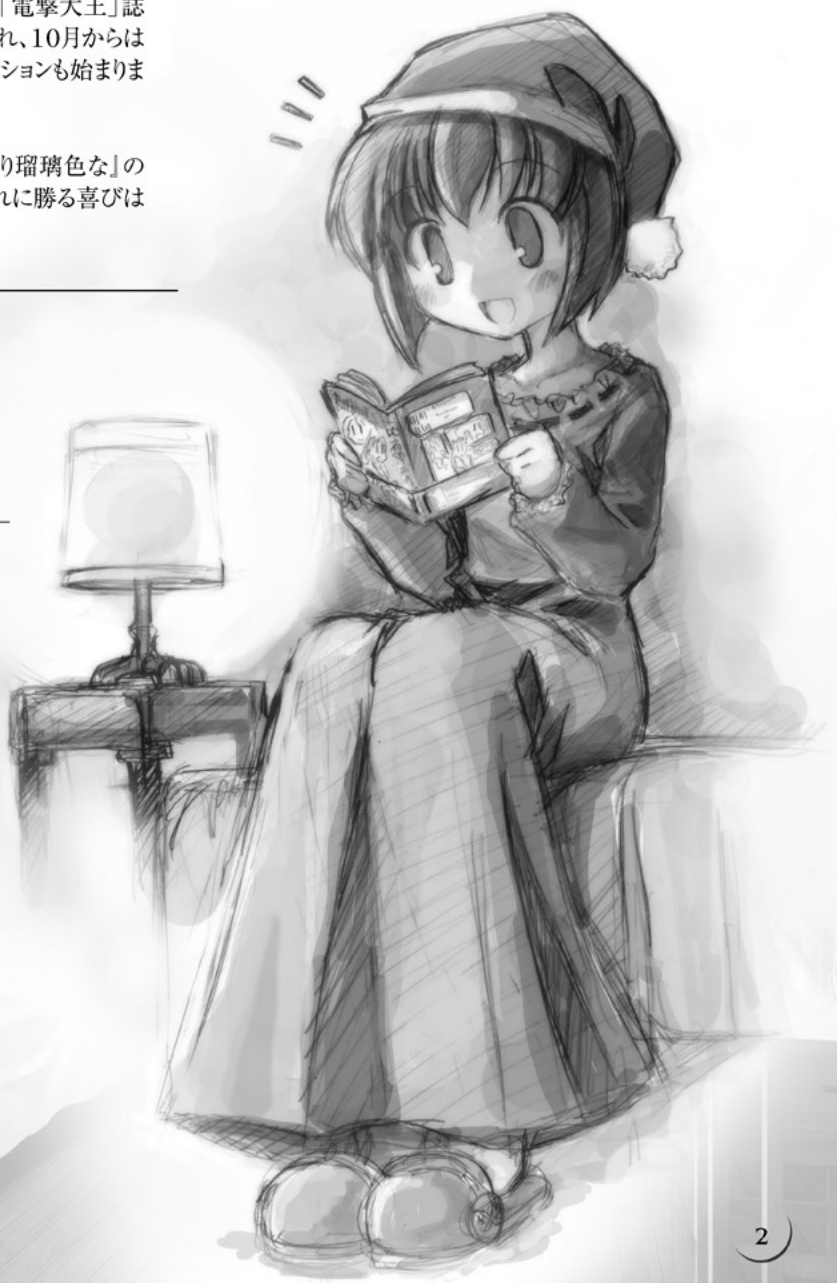
もちろん、弊社作品の同人誌を送って頂いた時にも、同じ嬉しさを感じています。これまでに送って頂いた皆様、本当にありがとうございました。多くのスタッフが拝読しておりますが、感想と御礼をお伝えできなくて本当に申し訳ございません。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2006年秋 オーガスト／ARIA 拝

CONTENTS

- 3 …… ベっかんこう描き下ろしマンガ『green, green』
- 6 …… 『夜明け前より瑠璃色な』ショートストーリー『初夏』
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき



green, green

べっかんこう

おはよ

おっはよー

なになに
何の話してるのー

ひびん

フィーナの髪が綺麗だつて話

まじすてー かわいいよな



朝霧君はまつすくな髪が
好きなのかな……？



……何を
してるんだ、遠山？





もういよいよ、
どうせわざいなんかさー



夜明け前の溜壩色な

Copyright © 2013 Shueisha Inc. All rights reserved.
A full-page photo was used on the cover of the magazine. The title and the name of the author are registered trademarks of the publisher.

「瑠璃色ショートストーリー」

初夏

安西秀明



「もうすぐ、夏がくる。こんな天気の良い日には、川の流れる音が心地よく感じられる。通り慣れた河川敷。学院が終わったという解放感で気持ちも晴れやかだ。」

「……菜月、ちよつと元気がないよな?」「ん? そうかな、あはは……」一緒に歩く菜月の足取りは、わずかに迷いの音を含んでいた。幼馴染としてずっと一緒に過ごしてきたからこそ、やつとわかる程度の違い。こういう元気がない菜月の姿は珍しい。昨日、仁さんと話したことを思い出す。

★

トラットリア左門でのバイト中のこと。仁さんがこっそり近づいてきた。「達哉君、最近菜月がお風呂を覗くと怒るのだよ」「何をしてるんですか、美の兄なのに」「ははは、冗談だよそんな怒った顔をしないでくれたまえ」「……別に怒ってませんよ」「それはそうと、うちの菜月に見られるのは仕事後のほうがいいんじゃないかな?」「べ、別にそんなことしてないですよ」そんなに菜月を見てしまっていたのだろうか?

か?

「……仁さん。なんか菜月の様子おかしくなってますか?」「ほうほう。さすがは達哉君といったところかな」「腰に手を当てる、二ヤリと笑みを浮かべる仁さん。」「ダイエツトってわけでもなさそうですよ……」

「では、なんだと思うかね?」「どこか試すような口ぶりだった。」「すつとなにか考えてるように見えますね」「僕にもそう見えるね」「でも、成績が落ちてるわけでもないだろうし……」

仁さんは、神妙な顔をして首を振った。「達哉君、あれは思春期独自の悩みなんじゃないかな」「思春期独自?」「身体や心や女の子独自の悩みということだよ」「すぐく幅の広い悩みですね」「というわけで、さくっと解決してくれたまえ」「えっ、俺がですか?」「仁さんの顔つきが、いつもと違う真剣なものに変わる。」「達哉君。菜月のことが心配じゃないのかい?」「……それは、心配です」

「悩みを一人で抱え込むのはよくないことなのだよ」「兄として菜月を心配しているのが、仁さんの声色から伝わってきた。」「菜月が僕に話すとも思えないしね。頼んだよ、幼馴染の達哉君」

「……」

★

川を眺めながら歩く菜月に、再び声をかけた。「菜月、何が悩んでるのか?」「えっ?」「菜月が、どきりとした表情を浮かべる。」「一人で抱え込むのはよくないと思っつ」「達哉、なんで知ってるの……?」「最近元気がないみたいだからさ」「そっか、達哉にはわかっちゃうんだね」「俺でよければ相談に乗るよ。思春期の悩みなんだろう?」「……ほえ?」

「女の子とかの悩みなら、麻衣や姉さんに言ってもいいしさ」「菜月がおでこに指を当てて眉を寄せる。やはり俺には言いにくいことなのか?」「なんて達哉は、思春期の悩みだっと思ってたのかな?」「菜月が笑顔浮かべて俺に聞く。」「目が笑ってなかった。」「仁さんが、思春期の悩みだっ……違うのか?」

「でたためて恥ずかしいこと、達哉に吹き込むな!」「菜月が空に向かってしゃもじを投擲した。ここから投げて果たして仁さんに届くのだろうか?」「そんなわけないよな……」

「ん?」「いや、でもさ菜月が悩んでるっていうのは本当なんだろう?」「……うん。まあ、そだね」「俺に話せないようなことなら、これ以上聞かないけど」「少し迷ったように考え込む菜月。」「……達哉にしか、言えないことかな」「それなら、なんでも話してみろよ」

夜明け前の溜唄な

Copyright © 2013, Shueisha Inc. All rights reserved.
A full-page illustration by the author of the original work.
The full-page illustration is the property of the author.

菜月が軽く下唇を噛む。そして決意したように、ゆっくりと唇を開いた。

「幼馴染のことが、好きになっちゃったの」

「瞬なんのことだかわからない。」

「……菜月、そんな目で、俺の……、いや、どう言ったら……」

菜月が、きよとん、とした顔をする。ほんっ

音を立てて菜月の顔が瞬間沸騰した。

「私じやない。私に相談した子がそう言ったのっ！」

「あ、ああ、なるほど。違う人の話か。いきなりだったんでびっくりした」

「それでね、その幼馴染を好きになった子が告白するのを迷ってるの」

「なんで迷うんだ？」

「相手の気持ちかわからないから」

菜月が俺から視線を外し、焼けたアスファルトを見つめた。

「それは普通わからないと思っぞ」

「だから、同じように幼馴染がいる私の気持ちを聞きたいんだって」

「なるほどね」

「幼馴染を恋人として考えられる？ って聞かれたんだけど、答えられなかったの」

「それで菜月は悩んでたのか？」

「うん……」

菜月が、真剣な様子で俺をじっと見る。

「達哉の意見も聞いてみたいな」

俺の幼馴染に対する気持ち……。

ずっと一緒にいた菜月。

いるのが当たり前になっている。

「……俺は、その、ずっと一緒にいたから、すぐに恋人だと思っるのは難しいのかもな」

いまいち想像ができないというのが正直なところだ。

「菜月はどう思っただよ？」

俺の言葉に、なぜかふらふらと視線をさまよわせる菜月。

「私も、いきなり恋人みたいになるのは難しいと思うんだけど」

「瞬、ちくりと胸を刺されたような気がした。」

「なら、そのまま伝えればいいと思っけど。」

「それじゃ駄目なのか？」

「うん……」

再び困った表情を浮かべる菜月。

「私が難しいと思うって答えたら、その子は告白するのやめちゃうと思っの」

菜月はそれで即答出来なかったのか。

質問には答えられるけど、それが悪い結果になるのがわかっていたから。

「それなら、伝えなければいいじゃないか」

俺の言葉にむっとする菜月。

「それじゃ相談に答えることにならないでしょ？ 達哉、真面目に考えてる？」

「いや、すぐ真剣だよ。ええと、つまり……」

「言いがちますかったようだった。」

「その相談してきた子は、告白したいのに迷ってるんだよね？」

「うん。そうだけど」

「それで、菜月に相談してきた」

菜月が小さく頷いた。

「つまりそれってさ、告白の後押しをしてほしいだけなんじゃないのか？」

「……え？」

鳩が豆鉄砲をくらったような顔をする菜月。

「そうなのかな？」

俺は菜月に頷く。

「俺はそうだと思うよ」

「じゃあ、私は告白を応援してあげればいいのか？」

「質問に答えるよりよっぽど、その子の力になれるだろう？」

「あー、そうかもしれない。なるほど」



夜明け前の溜め色な

Copyright © 2013 Shueisha Inc. All rights reserved.
A thin white line and the text "Copyright © 2013 Shueisha Inc. All rights reserved." are used as the registration mark of the copyright owner.
The title and the text "Copyright © 2013 Shueisha Inc. All rights reserved." are used as the registration mark of the copyright owner.

指を頬に当てて少し考える。

「そっか。応援してあげるのが一番いいよね……」

菜月が呟きながら、頷いた。

「うん、そうしてみるよ」

そう言っ、明るい笑顔をみせた。

「ありがとね、達哉。なんかすっきりした気がする」

「それはよかった」

いつも通りに戻った菜月の顔。さつきよりずっと輝いて見えた。

「ん……？」

その表情を見ていて、頭の中に疑問が芽生える。今度は俺の足が歩みを止めた。

「あれ。達哉どうしたの？」

菜月の長い栗色の髪が、俺を気にして揺れる。「なんで俺達はお互いになんとも思わないんだろっ？」

「えっと、好き、とかそういうことかな？」

「まあ、そうだな……」

「さつき達哉が言っただじやない。ずっと一緒にいるから難しいって」

物心ついた時からの付き合い。

小さい頃にはお風呂にだって一緒に……。

「菜月と過ごした時間が長いから、慣れてるのかも知らない」

「見飽きてるってこと？」

「ちょっと違つと思っ」

「ほうほう」

「どちらかといえば、俺達は家族みたいになつてるような気がする」

「……家族か。うん、そだね。近いかも」

「普通はさ、異性のクラスメートと二人きり

でいるだけで意識したりするんじゃないか？」

「私と達哉じゃ、いるのが普通って感じだよな」

「そっだな。学校でもバイトでも一緒だしさ」

「寝てる時以外はずっと一緒だもんね」

「寝てる時だって、窓を二枚挟んで向かいの部屋だつたりする」

「あはは、やっぱり家族みたいになつてる」

「そっだな。まったくだ」

菜月につられて笑つた。

「こうして一緒に帰つたりしたら、普通はどきどきしたりするかもね」

俺の顔をじつと見て言う。

「あー、そうかもな。俺達が見つめあつても何が起こるでもないし」

菜月の顔を見る。

「あははは、そだね。こうやって近づいても見慣れた顔があるだけでさ」

菜月が笑いながら、顔を近づけてくる。

見慣れた顔が目の前にある。

「菜月がアップになつただけだ」

「何とも思わないもんね」

いつもと違う距離。

「たぶん、一歩だけ近い」。

いつもより菜月の目が大きく見える。

「……菜月ってさ、結構目が澄んでるよな」

「え、えっと、あー、何言ってるのかな？」

菜月の頬が少しだけ桜色に染まる。

「なんでだ？」

「何も思わないはずなのに」。

「……な、なんでもない。ほら、菜月がいつもより近いから見やすいだけで」

「達哉、今ちょっと近づいた？」

お互いの靴の先がこすり、触れる。

「いや、ほ、ほらな。こんなに近づいても、何も……」

「うん、何も、ね……」

菜月の顔がさつきより赤くなったような気がする。

小さな呟きでさえ、とても大きく聞こえる。

「……なんてだろ。目の前で達哉の顔見るとね、懐かしい感じがする」

昔、菜月とこんな遊びをよくしたっけ。

「にらめっこだ」

小さい頃は、菜月の髪がいい匂いだなんて思わなかつたけど。

「じゃあ、逸らした方が負けなの？」

菜月の息が俺の肌をくすぐる。

「そうするか……？」

俺の言葉で菜月の髪がふわりと揺れる。

「ま、また少し近づいた、かな？」

菜月の顔が沸騰寸前に赤い。

でも、沸騰しているわけじゃない。

「菜月はこれだけ近くても大丈夫、なんだろう」

「だって、達哉相手だもん。私はへーき、だと思っ、よ？」

「なんかさ、我慢してないか？」

「達哉の顔が、おもしろいからだよ、うん」

俺の顔がおかしくて笑いを堪えてるだけなのか。

「……菜月の息が、くすぐりたい」

鼻先が触れ合いそうだ。

菜月が真っ赤になって震えている。

「……そ、そだね。でも、なんともない、でしょ……？」

泣き笑い、そんな表情。

目につつすらと涙が浮かんでいた。

「……」

堪えてるのは、笑いやない——。

顔が沸騰するのを堪えている菜月。

「ん……、達哉も、なんとも、ない……よね？」

「だめだ、そんな菜月を見ていたら気が変になりそうだ」。

間違つて、幼馴染を意識しまいそうに——。

「……菜月、これ以上近づくと、俺は……」

「ん、な、なにに？」

「……菜月のことを」。

にらめっここのギブアップ。

夜明け前の溜壩色な

Copyright © 2013, All Rights Reserved. This work is published under the license of the author. The text and illustrations are the property of the author.

る。
仁さんが見える。
仁さんが見える！
「仁さんが見えるっ！？」
「当たり前だよ達哉君。僕はステルスじゃないのだよ」
振り返る菜月。
仁さんを確認。
「ななななっ！」
ぼんっ！
菜月が堪えられなくなって一気に沸騰する。
俺から離れるように飛びのいた。
「やれやれ、遠くからしゃもしが飛んできたから何をしているのかと思えば」
仁さんが、頭をさする。
この距離から当たってたのか……。
「二人がまさかここまで関係になっているとはね」
仁さんがニヤリと口の端を歪める。
「うち違いますよ。にらめっこなんです」
「そうそうそう」
必死に菜月と二人で否定する。
その様子に仁さんが目を細める。
「悩み解決で付き合っことになったんだね。それとも……」
「仁さん、本当に違いますからー！」
「実は達哉君との恋の悩みだったのだね。いや、一線を越えられてなによりだよ」
「一線とか言っんじやないー！」
慌てる菜月を確認して、仁さんが真面目な顔を俺に向ける。
「達哉君、もういつそ義兄様って呼んでいいんだよ？」
「な、なんで結婚したみたいになってるんですか！」
「けけけ結婚っ！？」
菜月が再び瞬間沸騰。

「ほら達哉君、菜月もまんざらではないようだしね」
「まんざらだーっ！」
どかんっ！
「あーれー！」
菜月の一撃によって、仁さんは一瞬で真昼の星となった。
「はあー。まったく……」
菜月がため息を吐く。
俺たちの間に、川の流れる水音だけが残る。何て声をかければいいのかわからない。
沈黙に耐えかねたように菜月が口を開いた。
「兄さんが言うようなこと、何も無いのにね？」
俺の菜月への気持ちは……。
最後に菜月の目から視線を逸らしたあの時に。陽炎みたいに、揺れたのかも知れない。
「達哉……？」
覗き込む菜月の顔に、まだ少し沸騰の名残がある。
「い、いや、ないない。仁さんの勘違いだよん」
「そ、そっだよね、うん」
どこか気まずいような、それでいて心が躍るような感覚。
「達哉、そろそろ、いこっか……？」
「あ、ああ、そっだな」
お互いの歩幅を気にしながら、二人で歩き出す。
「達哉と、にらめっこしてただけだもんね？」
俺をちらりと見る菜月。
「そ、そっだよな、恋人みたいじゃ、なかったよな」
そう言い合いながらも、いつもと少しだけ違う距離。
一歩だけ、近づいた。
そんな感じがする。
もうすぐ、夏がくる。



神原拓(以下神):さて対談の時間がやってまいりましたが、今回はなんと!
べっかん(以下べ):なんと!?

神:背景担当の「阿舍利ん_16(あじゃりん・じゅうろく)」さんをお呼びしてみました。

べ:あじゃりんさんですー。わー。

阿舍利ん_16(以下16):向かいの蕎麦屋、今日定休日でしたナナ?

べ:いきなりボケからの登場ですが(笑) それじゃ始めましょうか。

神:ではまず……背景担当としてシナリオや原画に言いたいことがありましたらどうぞ。

べ:気になるところですね。

16:頭の中、背景のイメージがあるときは教えてほしいです。

神:なるほど。

べ:イベントCGとの連携はいつも大変ですよ。背景が完成する前イベントCG描かなきゃいけないからつらいところもあるの。

16:CGチームとの絡みでは、毎回、整合性を取るのに苦労します。CGの背景と汎用背景では作成する時期が前後するので。

べ:イベントCGの構成の都合で配置が微妙に変わったり。

16:ありますね(笑)

神:シナリオの都合で背景が変わったり。

16:それもありますね(笑)

16:シナリオ関連では、細かい差分が発生します。ミアの部屋の鳥がここか。

神:我々、迷惑がけつばなしじゃないですが。

べ:ごめんなさい、……対談ではいつモグストさんに謝ってますね。

16:並行作業なんて仕方ないです(笑)

神:では、背景担当として楽しんで時ってどんな時ですか?

16:キャラクター以外のビジュアルイメージは結構背景が決めているので、その辺りやりがいを感じるというが、面白い部分です。

べ:言われてみればそうですね。

神:そのあたりでは、よく監督とやりとりしてましたっけ。

べ:CS版では、翠ちゃんのうちとか、新しい背景が追加されましたね。

16:はい、翠の家や、目人居住区などが追加になりました。

べ:翠ちゃんのうちが思ったより大きくなってびっくりですよ。

16:お金持ちということでしたので。

べ:実はお嬢様でした(笑)

神:こちらはPC版からありましたが、主人公の父親の部屋はごちゃごちゃしていて大変そうですね。

16:ごちゃごちゃしていたり、汚いものを描くのが背景が一番大変です。

神:新しく作った図書室とエステルの部屋の背景も本だらけですね。

16:アリスは背景担当泣かせです。エステルは真面目で勉強熱心な人なので大きな本棚を描きました。

べ:本の背表紙とか解像度が高いバージョンだとちゃんと描いてあるのが判りますね。

16:部屋の背景では、住んでいる人の性格が伝えられるように、色使いや家具のデザイン、置いている雑貨などを選んでいきます。日頃から綺麗な建物や街並みがあれば写真を撮り溜めるようにしているのですが、それが生きてくるわけです。

神:では、そのロケハン中の思い出などを聞かせて下さい。

16:苦労はいろいろあります。通行人からは不審な目で見られますし、建物の警備員と話を聞かれたこともありますよ。

べ:写真を撮るのにモッコクがあるんですよ。

16:視点の高さを下げるために中腰で撮ることが多いので、ロケハンが長く足腰がやられます。単純に歩く距離も長いです。

神:そういえば、「夜明け前より瑠璃色な」時は私も一度いっしょに行きましたね。るねさんと三人で。

16:あの時は、Vイエースに自転車を載せていった記憶が。

神:懐かしいなあ。また行きましょう。

べ:最後にコーサーさんに伝えたいことがあればどうぞ。

16:一枚一枚の背景は、準備から含めるとかなりの時間をかけて作成されているので、良かったら、気にしてみてください。

神:今回は「阿舍利ん_16 独占インタビュー」みたいな展開でしたね(笑)

べ:近頃は何かないんですか?

神:脳木江さんが電撃大王で連載している漫画の第一巻ですが、おかげさまで早速増刷となりました!

16:おお、それはめでたいです。

神:あと、10月4日からアニメもスタートですよ。

べ:もう明日だったし、楽しみにしてますね。

スノウ村談 第15回 べっかん(以下べ) & 神原拓 + 阿舍利ん_16



POSTSCRIPT - あとがき

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

「アンケートの内容を受け止め、次回作に活かすまでが一本のソフト作り」だと前回の小冊子で書いたのですが、おかげさまでまたアンケート葉書を頂く枚数が増えました。

まだお手元に葉書を眠らせている皆様、特に「アンケートなんて出したことないし、どうしようかなー」と迷っている方がいらっしゃいましたら、是非貴重なご意見をお寄せ頂ければ幸いです。

さてPS2版『夜明け前より瑠璃色な』の発売が近づいている一方、新作の企画の方は非常に難航しています。産みの苦しみ。今が一番の踏ん張りどころなので、スタッフ一同、一生懸命頭を捻り続けています。

発表までもう少々お待ち下さい。

それでは、今回はこの辺で。

今後とも、オーガスト／ARIAをよろしくお願い致します。

2006年秋 オーガスト／ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック
2006年秋号

最新情報満載！
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい！

<http://august-soft.com/>

※禁無断転載・無断複製



夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness surround all
A fire goes before him, and burneth up all thorns
The hills melted the wax at the presence of his anger, and trembled.

Brighter than dawning blue

オーガストオフィシャルハンドブック
2006年秋号



Copyright 2005-2006 AUGUST All Rights Reserved.